

シンポジウム
「分断と孤立化を超える思想」

【趣意書】

いま、われわれは多くの矛盾を抱える困難な状況の中で、先の見えない不安を抱えながらかすかな希望の芽を求めて苦闘している。もちろん、それは直近では新型コロナウイルスの世界的な感染拡大と、それにとまなうグローバル資本主義の急速な悪化が引き起こした経済的困難によるものであろう。だが、すでに E. トッドをはじめ多数の識者が指摘しているように、今回のコロナ禍はこれまでと全く異なる困難を引き起こしたというよりも、それ以前からわれわれを苦しめてきた諸矛盾を凝縮して表面化させた、と見るべきだろう。

トランプ米大統領を筆頭に、パンデミック状況においてさえ自らの政治的利益のために他国を非難して対立と分断をあおる政治家たちの姿は、確かにわれわれを啞然とさせた。だが、トランプ政権誕生やブレグジットをはじめ近年の世界的な政治状況において、すでにわれわれは政治家たちのこうした姿勢をうんざりするほど目にしていたはずだ。われわれはただ、「この期に及んでこの言動をするのか」と啞然としたにすぎまい。「コロナウイルスなどたちの悪い風邪のようなものだ」と言い放って感染拡大防止よりも経済的利益を優先する政治的発言が国内外で横行したのも同類である。日本での特別給付金をめぐる顛末など、国民の生活保障に対する日本政府の長年にわたる出し惜しみの最たるものと言えよう。

当然ながら、問題は政治状況だけではない。いよいよ顕在化しつつある経済的な困窮の広がりや、今後、非正規雇用者を中心とする生活困難層を直撃するだろう。だが、これもグローバル資本主義の支配層が自らの失敗を世界規模で民衆に押しつけたリーマン・ショックの「増補第2版」となりそうである。もしそうなら、「初版」後における経済格差と貧困の拡大が、「オキュパイ・ウォールストリート」や「年越し派遣村」などの連帯の可能性をほらみつつも、排他主義や権威主義的ポピュリズムへと吸い寄せられていった経緯も繰り返される恐れがないとは言えまい。すでにコロナ禍のもとで、健康不安と経済的困難にさらされる人々の間で、不安と危険を少しでも増大させそうな他者に対する敵意が広がる気配もうかがえる。医療従事者への嫌がらせやいわゆる「自粛警察」、域外（「県外」であれ「国外」であれ）への排他感情、世代間対立など、その兆候は各所に見てとれよう。実際、経済生活全般の危機に対して競争至上主義の下で個人的な対処を強いられるなか、これらの感情的反応が生まれるのはある意味で無理からぬ帰結と言える。さらに「新型コロナウイルスへの対処」という、最も科学的事実が重視されるべき問題についてさえ陰謀論を含むフェイクが飛び交い、人々が「都合の良い真実」にしがみつく「ポスト・トゥルース」状況は、対話を拒み分断と敵意をあおる権威主義の格好の培養地であろう。本来であれば、人々の間でリスク判

《シンポジウム》
「分断と孤立化を超える思想」

断の大きな乖離が生じた際の調整は最重要な政治的課題の一つであるはずだ。だが、政治家たちがそうした課題をかなぐり捨て、建前としてさえ「国民全体の包摂」を語らなくなり、企業でも大学でも、様々な場面で対話そのものが成り立たず困惑するようになってから、すでに久しくはないだろうか。

こうしてみれば、現在の状況の背後には、すでに多年にわたって深刻化してきた社会的矛盾が潜んでおり、コロナ禍はそれを凝縮して表面化させたのだと言えよう。グローバル資本主義の拡大と福祉国家的統合の解体、経済的格差の激化と経済的貧困の増大のもとで、社会関係や社会文化的経験の貧困までもが拡大している。特に経験の貧困、経験を基盤とする様々なリテラシーの貧困は、自らの困難を他者と共有し連帯を生み出す回路を失ってしまうという点で深刻な問題であろう。そこに輪をかけて、新自由主義的な思考様式は人々に「社会的な危機に対して個人的に対処するように」圧力をかけ、孤立化と分断を推し進めている。いわゆる「コロナ DV」や、外出「自粛」による単身高齢者の健康悪化の懸念などは、コロナ禍のもとで日本における孤立化と分断の様相が凝縮されたその端的な表れであろう。こうした例からもうかがえるように、今回の事態が示したのは、まさに分断と孤立化の状況が待ったなしのところまで深まっている事実には他ならない。

しかし同時に、今回のコロナ禍は、この分断と孤立化の克服が真に求められていることをも凝縮して示しているように思われる。実際、パンデミックへの対応には明らかに国際的な連帯こそが不可欠であるし、そのために政治的・経済的利益をある程度犠牲にする必要があることも言を俟たない（グローバル製薬会社がワクチンを開発したとしても、それを独占して利益を追求すれば結局は自分の首を絞めることとなろう）。また、アメリカでは大統領予備選を撤退したサンダース候補の政策的主張（特に大学無償化の主張）が、むしろコロナ禍による経済危機のもとで見直され、バイデン候補の政策に取り入れられる動きもあると報じられている。さらに現在もなお継続している反人種差別デモは、コロナ禍が表面化させた長年にわたる分断と孤立化に対し、再度挙げられた抗議の声とも見られよう。また日本でも今年前半の、特別給付金や検察庁法改正をめぐる「twitter デモ」と呼ばれる動向などは、「素人は口を出すな」という威圧に抗し、経験とリテラシーの壁を越えて連帯する可能性を垣間見せるものではなかっただろうか。そしてこうしたさまざまな動きもまた、コロナ禍で急に発生したのではなく、上述したリーマン・ショック以降のアメリカにおける若者の運動や2013年以來の「Black Lives Matter」運動、日本での青年ユニオンやSEALsなどの新たな連帯を模索するこれまでの運動の延長上に現れた現象でもあろう。その意味では、分断と孤立化を克服しようとする模索もまた、すでに多年にわたって、さまざまな場で進められ引き継がれてきたと言える。

だがそれだけに、すでにこれまでも、こうした動きが右派ポピュリズムのバックラッシュに直面し、厳しい状況へと追い込まれてきたことにわれわれは留意しなければならない。まさにその象徴が冒頭で触れたトランプ政権とブレグジットではなかつ

《シンポジウム》
「分断と孤立化を超える思想」

ただろうか。だとするなら、現在もまた、分断と孤立化を克服し連帯を生み出す可能性と、対立と敵意をあおる権威主義に引き寄せられ分断と孤立化を深めてしまう可能性、この両者の分水嶺に立っているのである。だからこそ今、われわれはあらためて、分断と孤立化を超えるために何が必要なのか、どこにどのような基盤を構想しうるのか、思想的に深くとらえなおさなければならない。

今大会のシンポジウムで問うのは、分断と孤立化を超える可能性と、その思想的な深い基盤である。報告者として、まず児島功和氏には、現代日本の大学で働く研究者が置かれている分断と孤立化の状況、そしてそこから考えられる連帯の可能性についてご報告いただく予定である。ついで工藤律子氏には、市民政治や「社会的連帯経済」の広がりなど、スペインでの新たな試みの事例を通じ、分断と孤立化を超える具体的な取り組みについてのご報告をお願いしたい。そして小山花子氏には、ハンナ・アーレントにおける「世界の共有」や「ともにあること *togetherness*」の概念を手がかりに、経験と対話の可能性を通じた新たな連帯の思想的な基盤について論じていただく。

そもそも本シンポジウムは、ウイルスの感染拡大次第で開催自体が危ぶまれる状況にあった。それでも、以上のご報告者3氏と、フロア（オンライン）参加者との討議を通じ、現在の分水嶺を新たな連帯へと踏み越えるためのささやかな一歩を刻もうとするものである。

この状況下で本シンポジウムにご参加いただける諸氏による、白熱した議論を願ってやまない。